

アタッチメントに焦点づけた

親子関係支援の実践と親子の変化

——親子の行動観察と

親の語りに基づいた考察——

北川 恵・岩本 沙耶佳

1、はじめに

近年の核家族化や地域のつながりの希薄化などを背景として、子育ての孤立化による不安感や負担感などが課題になっている。厚生労働省は政策として、子育て中の親が気軽に集い交流できる「地域子育て支援拠点の設置」などに取り組んでいる。そうした取り組みは広い対象に有益である一方、「どうしても子どもに対して感情的になってしまふ」といった親子の関係性の問題を支えるためには、関係性に焦点づけた支援が役立つだろう。特に、子どもが養育者に形成するアタッチメントの質が、その後の発達やメンタルヘルスに長期的で重要な影響をもつことが発達研究を通して明らかになっていることから、その健全化は

重要である。大学で行う子育て支援だからこそ、そうした専門的な支援が実践可能であり、甲南大学人間科学研究所では二〇〇九年よりアタッチメントに焦点づけた親子関係支援の実践を行ってきた。本稿では、アタッチメントに焦点づけた親子関係支援について概説し、甲南大学での実践と親子の変化を振り返る。最後に、大学における子育て支援の位置づけと今後の課題について述べる。

2、アタッチメントに焦点づけた親子関係支援

2-1、アタッチメントとメンタルヘルス

(1) アタッチメントとは

アタッチメントとは人間の生涯にわたる基本的欲求であり (Bowlby, 1969/1982)、「恐れ」の調整を目的として、特定の他者への近接 (attach) を求めるものである。特に、危機的状况への対処能力が低い乳幼児においては、見知らぬ場所や見知らぬ人の接近などの外的要因や、飢えや乾きなどの内的要因によって危機感や不安が高まるため、繰り返しアタッチメント欲求が活性化し、泣き・発声・ハイハイなどのアタッチメント・シグナルを発して養育者との近接を求め (アタッチメント行動)、安全や安心を得ようとする (数井、二〇一三)。安心できて初めて、探索欲求が高まり、好奇心を発揮して環境に働きかけた

り、物事に集中して取り組んだりすることができる。

(2) アタッチメントのタイプとその後の発達

アタッチメントは誰にとつても切実な基本的欲求であるため、子どもは養育者の特質に応じて、必要な時に養育者に近接して最低限の安心を得るための方略を見出すようになる。それがアタッチメントの個人差や問題となる。Ainsworth, Behar, Waters, & Wall (1978) は、アタッチメントの個人差を把握する理論的枠組みを整理し、実験的な測定手法であるストレンジ・シチュエーション法(以下、SSP)を案出した。新奇な場面で、見知らぬ人との対面や、養育者との分離といったマイルドなストレス状況に置かれた子どもが、養育者にどのようなアタッチメント行動を向け、また養育者を安心の基地としていかに利用するかを観察する(遠藤・田中、二〇〇五)。

SSP場面で、養育者との分離に混乱を示し、再会した養育者に慰めを求めて(率直なアタッチメント行動の表出)、その後落ち着きを取り戻して探索に戻ることができる(安心の基地として養育者を利用できる)子どもは「安定型アタッチメント」と評価できる。こうした子どもたちは、必要な時にはいつでも安心感を与えてもらえるという期待を養育者に形成しているため、アタッチメント欲求と探索欲求を率直に表出できる。

ところが、養育者の応答性が一貫しない場合、子どもはアタ

achment欲求の表出を最大化する方略が近接確保に有効であると学習するようになる。こうした子どもは、アタッチメント行動を向けながらも、なかなか不安がおさまらず探索に戻れないため、「アンビバレント型アタッチメント」と評価される。

あるいは、子どもが慰めを求めると養育者が拒絶的に振る舞う場合、子どもはアタッチメント欲求の表出を最小化する方略が近接確保に有効であると学習するようになる。こうした子どもは、ストレス場面でも養育者に慰めを求めず、何事もなかったかのように振る舞うため、「回避型アタッチメント」とみなされる。

これらはいずれも不安定型アタッチメントと呼ばれており、アタッチメントと探索の自然な欲求表出が制限された状態といえる。

さらに深刻なアタッチメントの問題は「無秩序型アタッチメント」という状態である。養育者との再会に際して、接近と回避という矛盾した行動を同時的・継時的にとつたり、フリーズ状態に陥つたりと、極めて混乱した行動を示す。養育者が子どもを虐待していたり、養育者が未解決のトラウマを抱えていたりすると、子どもは養育者との関係で恐怖を体験する。恐怖を感じた子どもは、養育者へのアタッチメント行動としての近接欲求と、恐怖の源である養育者から離れた回避欲求が同時に高まり、解決できないジレンマに陥ることになる。本来、安全

と安心の拠り所である養育者が恐怖の源になる、という意味で、無秩序型アタッチメントはもつとも深刻なアタッチメントの問題であるといえる。

(3) アタッチメントとメンタルヘルス

発達心理学では、長期的な縦断研究知見が蓄積されている。環境が劇的に変化しにくい中流階級サンプルにおいては、乳児期のアタッチメントの質が、成人期初期のアタッチメントの質に時間的連続性をもつことが報告されている (Waters, Weinfield, & Hamilton, 2000; Hamilton, 2000)。成人のアタッチメントと精神病理との関連については、安定型アタッチメントが精神病理への保護要因となる一方、不安定型アタッチメントはリスク要因となることがわかっている (北川, 二〇〇七)。米国ミネソタ州で大規模に行われた縦断研究からは、乳児期の安定したアタッチメントが子どもの健全な発達に長期的で重要な影響をもつこと、乳児期の無秩序型アタッチメントが解離障害への高いリスク因になることが報告されている (Sroufe, Egeland, Carlson, & Collins, 2005)。

こうした知見により、乳幼児期のアタッチメントを健全なものにするための支援の必要性が裏付けられる。

2-2、健全なアタッチメントに必要な養育者の関わり
子どもが健全なアタッチメントを形成するために、養育者に必要な関わりについても実証的な検討がなされている。

まず注目されたのは、養育者の敏感性(子どもの心身の状態を敏感に察知し、子どものニーズに対して適切に応じ得る特性)である。Answorth et al. (1978)は、SSPと家庭での母子相互作用の観察を併せて実施し、安定型アタッチメントの子どもの養育者は、相対的に敏感性が高く、行動に一貫性があることを報告している。さらに近年では、敏感な養育行動を可能にする養育者自身の特性として、子どもの視点に立って子どもの内的状態を理解しようとする態度(洞察力、内省機能、マインド・マインデッドネスなど)の重要性も注目されている(遠藤, 二〇〇七)。

以上より、子どものアタッチメントを健全なものにするために、養育者を対象として、子どもの欲求や気持ちへの理解(内省)と、応答性(敏感な養育行動)を高める支援が妥当であるといえる。

2-3、アタッチメント理論の実践への応用

世界の乳幼児精神保健領域では、研究と実践の橋渡しの機運が高まっており、根拠に基づく親子関係支援が展開している (Berlin, Ziv, Amaya-Jackson, & Greenberg, 2005, Oppenheim &

Goldsmith, 2008 数井他訳(二〇一)。

そのなかでも、サークル・オブ・セキュリティ(The Circle of Security, 以下COS)プログラム(Cooper, Hoffman, Marvin, & Powell, 2000)は、わかりやすい心理教育と実証された介入効果(Marvin, Cooper, Hoffman, & Powell, 2002)によって大きな注目を集めている。二〇一三年には、アタッチメント理論と研究を臨床に応用した成果により、Bowly-Ainsworth賞を受賞している。

COSプログラムについては他でも紹介しているので詳細はそれらを参照されたいが(北川二〇一a・北川二〇一b)、簡単に紹介すると、アタッチメント理論に基づいた、乳幼児をもつ養育者へのビデオを用いた介入プログラムである。標準的には六組(子どもはアセスメント時に参加)でのグループで、毎週七五・九〇分のセッションを二〇回行う。介入前に構造化されたアセスメントを行い、各親子の介入目標を作成する。セッションは、子どものアタッチメント欲求と養育者の必要な関わりを養育者にわかりやすく伝える心理教育と、養育者自身の不安を調整するための内容的対話からなる(表1)。

COSプログラムは、子どものアタッチメント改善効果が実証されているが、実施へのコストも高い。そこで、支援者がより簡便に習得でき、より短期間で(標準的には八週間)柔軟な人数のグループに(個別から二〇組ほど)実施できる方法とし

表1 COSプログラムの内容と進行

《介入前アセスメント》	ストレンジ・シチュエーション法、COS インタビュー →各親子の介入目標作成、セッションで用いるビデオ場面の選定と編集
セッション1~2	良好な相互作用場面の視聴、安心感の輪について心理教育
セッション3~8	第1期ビデオ振り返り(各回1組の親子を対象)
セッション9	防衛について心理教育
セッション10~15	第2期ビデオ振り返り(各回1組の親子を対象) →2回目の変形ストレンジ・シチュエーション法(第2期ビデオ振り返りを終えた親子から順次実施)
セッション16	これまでのまとめと振り返り
セッション17~19	第3期ビデオ振り返り(各回2組の親子を対象)
セッション20	心にとめておいて欲しい場面の視聴、卒業式

表2 COS-Pプログラムの内容

セッション1	「安心感の輪」子育てプログラムによるこそ
セッション2	「安心感の輪」をめぐる子どもの欲求を知ろう
セッション3	「安心感の輪」に寄り添うこと
セッション4	赤ちゃんの「安心感の輪」に寄り添うこと
セッション5	安心感への道のり
セッション6	自分自身の課題を見つめる
セッション7	関係のほころびと修復
セッション8	まとめとプログラム終了のお祝い

て、サークル・オブ・セキユリティ・ペアレンティング (The Circle of Security Parenting[®] 以下 COS-P) プログラムが開発された (Cooper, Hoffman, & Powell, 2010)。COS プログラムのエッセンスを効果的に伝える心理教育用の DVD の視聴と、ファシリテーターと養育者による内省的対話からなる (表 2)。

3、甲南大学人間科学研究所での実践と親子の変化

3-1、実践の歩み

(1) COS プログラム

甲南大学人間科学研究所では、二〇〇九年より、日本で初めて COS プログラムを実践してきた。COS プログラム実施資格取得のためには、本プログラム開発者による研修を受けた後、アセスメントと治療計画の信頼性テストに合格し、その後、最低二グループは開発者によるスーパービジョンを受けることが必要である。本研究所においても、そうした訓練を受けた北川が、最初の三年間は開発者によるスーパービジョンを受けながら実施した。プログラムは、日本語の通称として「親子がホッとつながるグループ」とした。

(2) 地域連携と参加者募集

アメリカで開発されたプログラムを日本に導入するにあたり、

本プログラムが日本の親子にも効果的かどうかを検証しながら、同時に、実施者が手順に慣れることが必要であった。そのため、対象者はハイリスクな臨床群ではなく、「子どもとの関係を振り返りたい」という動機づけをもつ地域の親子とした。

参加者募集のため、二〇一〇年度から、地域の保護者向けの「子育て応援講座」を開催してきた。一回だけの講座だが、アタッチメントの視点をわかりやすく伝えることを第一の目標とし、次いで、本プログラムについても紹介し、内容をよく理解したうえで参加希望者を募った。そうして夏から冬にかけて、毎週の COS プログラムを実践してきた。

支援活動の継続のためには、地域との関係作りも不可欠であるため、二〇一一年度からは、「子育て応援講座」の約一か月前に、地域の支援者向けの「スキルアップ講座」を開催することにした。地域の支援者に、本研究所での子育て支援活動を知ってもらい、また、アタッチメントの視点を共有することを第一の目標とし、心当たりがあれば「子育て応援講座」に保護者を紹介してもらう関係を構築してきた。

(3) COS-P プログラム日本語版

COS プログラムは日本の親子にも効果的であったが、地域の支援者に本プログラム実施を勧めるには修得と実施のコストが高いことも事実であった。同じ理由で、アメリカで COS-P

プログラムが開発されていることを知り、二〇一二年度はその日本語版（「安心感の輪」子育てプログラム（北川・安藤・松浦・岩本、二〇一三））を作成した。

二〇一二年度からは、本研究所で行っている「親子がホッとつながるグループ」の内容として、まず全八回のCOSPPプログラム日本語版を行い、その後、COSで実施している参加親子のビデオ振り返りを行う形態にした。

（4）教育活動との連携

大学で子育て支援の実践を行うことは、地域貢献の役割に加えて、教育の機会にもなることが望ましい。臨床心理士を目指す修士課程の大学院生や、心理学に関心をもつ学部学生にとっては、発達臨床を実践的に学べる機会は貴重である。そうした機会を実現するために、グループの各時期に行うアセスメント（SSPやインタビュー）やグループ中の子どもの託児への、学生・院生の参加希望を募り、事前教育を伴う実践参加の機会を設けてきた。毎回のグループセッションの後、また、年度末に、実践を振り返る学びの時間ももってきた。

（5）効果研究

アメリカで開発されたプログラムの日本導入にあたり、日本での効果検証や、日本文化に即した内容の修正は重要課題であ

る。効果研究は、科学研究費補助金の予算を受けて行ってきた（科研費（2130575）（25389967））。

以下に、本グループに参加した親子の変化について、実践を通して事例検討的に捉えた結果と、量的な検討を試みた結果を報告する。なお、二〇〇九年から二〇一三年までの五年間で、一歳〇か月から九歳〇か月（平均三歳〇か月）の二一名の子ども（男児一〇名、女児一一名）と養育者（母親二一名、父親一名）が参加し、六組が中断し（親の体調不良、転居などの理由による）、一五組がグループの全内容に参加した。グループ開始前とグループ後半に、親子の行動観察（SSP）、親へのインタビュー（COSインタビュー、以下COSI）を実施した。二〇一〇年参加者以降には、グループ終了半年後にも同様のアセスメントを行っている。アセスメントでは、親への質問紙も行っているが、本稿では、行動観察とインタビューで測定した結果について報告する。

3-2、親子の変化

（1）親子の行動観察

① SSP 場面の事例検討的理解

表1に示したとおり、COSプログラムでは、プログラム前に撮影したSSP場面から編集したビデオクリップをグループセッションで視聴する。第一期ビデオ振り返りでは、親子の良

好な相互作用に注目し、そうした相互作用が親子に増えることを目標とする。プログラム半ばの第二期ビデオ振り返りにおいて、親子の間で繰り返されている相互作用の問題に目を向ける。その頃には、養育者には、子どもの行動を観察し、欲求を推測する能力が高まっているため、養育者自らが相互作用の問題に気づくことができる。グループでは、養育者の気持ちについても丁寧に話し合う。その後、二回目の SSP を行う。養育者は子どもの欲求に応答的になっていて、かつ、子どももアタッチメント欲求を率直に表出できるという変化が認められることが多い。そうした肯定的変化を第三期ビデオ振り返りで養育者と共有する。

このように、セッションでビデオ振り返りを行うために実施される SSP であるが、ここに表れる親子の変化は、介入の効果を示すものでもある。さらに、二〇一〇年度参加者以降は、介入効果の持続性を確かめるため、介入終了半年後にも SSP を実施している。

COS プログラムの導入期は、アメリカで開発された支援が日本の親子に有効であるかが問題であった。Kitagawa (2011) は、二〇一〇年度参加者の SSP 場面に表れた変化を報告し、本プログラムが日本の親子にも有効であることを示した。単一事例を詳細に報告した北川 (二〇一一) によると、プログラム前の SSP 場面では、子どもは母親にアタッチメント行動を率

直に訴えず、母親も応答していなかったが、プログラム後半には、子どもは慰めを求め、母親はそれに応えるという変化が生じていた。プログラム終了半年後の SSP 場面からは、分離再会場面で親子はより率直に落ち着いてやり取りしていて、肯定的変化が持続していることを確認できた。

二〇一二年度以降は COS-P プログラムを実施してきた。ビデオ振り返りを行わない COS-P プログラムにおいては SSP は必須ではないが、親子の変化を捉える目的でプログラム前後に SSP を行ってきた。COS-P プログラム前後の SSP を比較すると、プログラム前は子どものアタッチメント欲求に答えにくかった母親が、プログラム後は子どもの気持ちに寄り添った関わりをしているという肯定的な変化が認められた (岩本・平野・山根・北川、二〇一三)。

② SSP 場面と託児場面観察との対応

母親がグループに参加している間、子どもは、大学院生や学部生による託児を受けた。託児場面においても時間経過に伴って、子どもの変化が観察できた。たとえば、ある男児は託児中、お気に入りの「物」を握りしめて過ごしていた。まるで、慣れない場所で母親と離れて過ごす不安を、「物」を握りしめることで対処しているようであった。ところが、プログラムの経過に伴って、託児の始まりに母親が子どもの気持ちを丁寧に受け

止めて見通しを与え、託児終了後にしっかりと慰めることができると、子どもは託児中に「物」を握りしめる時間が減少した(岩本・西山・北川、二〇一三)。こうした変化は、子どもの成長や託児場面・スタッフへの慣れという要因もあるだろうが、OSプログラムに参加した母親との関係性が肯定的に変化したことに伴うものであると理解できる。託児スタッフがアタッチメントの視点をもつことの有効性は、泣いて分離を嫌がるようになった子どもの変化に戸惑う母親に、変化の肯定的意味を伝えることができた事例や、スタッフ自身が託児中の子どもの行動の意味を適切に理解し対応できた事例を通して報告された(岩本・山根・北川、二〇一三a)。

託児場面の最初と最後は、親子の分離と再会場面である。岩本・山根・北川(二〇一三b)は、単一事例を対象に、プログラム前とプログラム後半のSSPで認められた変化と、託児中に観察された変化との関連を検討した。その結果、プログラム前のSSPで示された子どもの接近回避行動は、託児場面でも同様に観察された。プログラム後半、SSPで子どもは母親に率直にアタッチメント行動を向けるようになっており、託児場面でも、再会した母親に満面の笑みで駆け寄るという率直なアタッチメント行動を示す変化が認められた。

SSPを実施することが困難な実践現場においても、託児場面など親子の自然な分離再会を観察できる機会はあるだろうから、

SSP場面と託児場面観察との対応を検討することは重要な研究課題であり、検証を続けてきた。平野・岩本・山根・北川(二〇一三)は、二〇一二年度参加者の事例検討により、託児場面での変化とSSPの変化との対応を報告した。一方、平野・岩本・鈴木・上杉・北川(二〇一四)による二〇一三年度参加者の事例検討からは、グループ後期のSSP場面でも子どもが率直なアタッチメント行動を示した一方、託児場面では養育者への接近に躊躇する様子が観察された。当該児は三歳台であり、グループ後期になると、ある程度慣れた託児場面のストレス価は低くなり、また、託児場面には年下のきょうだいが同室していたことで遠慮が生じた可能性も考察された。今後は、場面のストレス価、年齢に応じたストレス対応能力に照らして、観察されたアタッチメント行動を評価する検討が課題である。

③ SSP場面における子どもの行動について、量的検討の試み研究のための測定法として実施されるSSPは、訓練を受けた評価者がアタッチメントの4つのタイプに分類する。本グループに参加した親子についても、SSPの訓練を受けた岩本と梅村によって、こうした検討を行っていく予定である。その最初の報告が、Kitagawa, Iwamoto, Kazui, Kudo, Matsuura, & Umemura (2014) によってなされた。

一方で、介入プロセスに伴う親子の変化を詳細に捉えていく

ためには、四分類を行うだけでなく、アタッチメント行動をより詳細に捉える評価尺度が有効であろう。SSP分類の資格をもつ岩本を中心に、子どものアタッチメント行動を量的にとらえる行動観察指標の作成を試みている (Iwanoto, Hirano, Uesugi, Suzuki, & Kitagawa, 2014)。

(2) 親の語り

① COSI の事例検討的理解

COS プログラムでは、SSP 場面に表れる親の応答性の問題の背景を、仮説的・共感的に理解するために、親へのインタビュー (COSI と呼ばれる面接) を親に行う。COSI の実施と評価の方法の詳細は、北川 (二〇二二b) を参照されたい。

COS プログラムでは、養育者が子どもの視点に立って子どもの内的状態を理解できるようになることを目指している。COSI では、SSP での分離や再会場面で子どもがどんな体験をしたかと思うかを尋ねる一連の質問項目があり、子どもの気持ちに思いを馳せる程度 (例えば、寂しかったかと思う vs 特に何も思っていないか) や、気持ちの読み取りの適切さ (例えば、泣いていた子どもの気持ちを、私がいなくて不安だかと思う vs 私を困らせようとしていた) などが評価できる。

本プログラムに参加した母親には、プログラム前に加えて、プログラム後半にも COSI を実施し、親の語りの変化を検討し

てきた。北川・岩本 (二〇二二) は、二〇二一年度に参加した五名の母親の COSI を対象に、子どもの内的状態についての言及と気持ちの読み取りの適切さを検討した。その結果、プログラム後半には、子どもの内的状態への言及数が増加し、気持ちの読み取りの適切さも高まっていた。

② COSI における子どもの内的状態への親の言及について、量的検討の試み

COSI における親の語りの変化を捉える指標の作成も試みている。Kitagawa & Iwanoto (二〇二二) は、「子どもの気持ちへの適切な言及」「子どもの気持ちの否定や軽視」「子どもの気持ちの不適切な読み取り」という指標を設定し、これらの出現頻度を測定した。二〇二一～二〇二二年度にグループに参加した母親七名の結果を比較したところ、グループ後には「子どもの気持ちへの適切な言及」が増加していた。その後、これらの指標の基準について、篠原 (二〇二六) のマインド・マインデッドネスについての先行研究を踏まえ、また、評定者間の一致率も検証しながら、精緻化を進めている (Iwanoto et al., 2014)。特に、「不適切な読み取り」は評価者の主観的な判断に影響を受けやすいため、評価基準を明確化することが今後の課題である。

4、おわりに…今後の課題と展望

以上、概観してきたように、アメリカで開発されたアタッチメントに焦点づけた親子関係支援を日本の親子に実践し、親子の肯定的変化を認めてきた。今後は、効果が裏付けられてきた実践を、地域の子育て支援の現場に還元したい。その際には、支援者にとって修得と実施が容易なCOS-Pプログラム日本語版が有益であろう。地域でCOS-Pプログラムを提供し、さらに、COS-Pプログラムにおけるビデオ振り返りのような専門的な支援が必要な親子を大学に紹介してもらえらる連携関係の構築を目指したい。また、親子の関係を評価する方法として、SSPなどアタッチメント研究で標準的に用いられている方法は、実践現場には敷居が高いものである。そのため、すでに探索的に取り組んでいるように、親子の行動や親の語りを、アタッチメントの視点から評価する方法を洗練させ、実践現場に紹介していくことが今後の課題である。また、大学で実践を行う意義としては、それが学生・院生にとつての教育の機会にもなることである。将来の養育者であり、心理学を学ぶ学生・院生にとつて、アタッチメントの実践研究に関わることの教育的意義についても検証したい。教育、研究、地域貢献の役割に応える大学での実践を今後とも目指したい。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment: Assessed in the Strange Situation and at Home*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Berlin, L. J., Ziv, Y., Amaya-Jackson, L., & Greenberg, M. T. (2005). *Enhancing early attachments: theory, research, intervention, and policy*. New York: Guilford.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Cooper, G., Hoffman, K. T., Marvin, R. & Powell, B. (2000). *Circle of security: Facilitator manual*. Unpublished manuscript, Marycliff Institute, Spokane, WA.
- Cooper, G., Hoffman, K. T., & Powell, B. (2010). *The circle of security parenting program*. Unpublished manuscript, Marycliff Institute, Spokane, WA.
- 遠藤利彦 (二〇〇七). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp.1-58.
- 遠藤利彦・田中亜希子 (二〇〇五). アタッチメントの個人差とそれを規定する諸要因 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房 pp.49-79.
- Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from

infancy through adolescence. *Child Development*, 71, 690-694.

平野慎太郎・岩本沙耶佳・鈴木敏史・上杉裕香・北川恵（二〇一四）.

託児場面での親子の観察に基づくアタッチメント理解についての事例研究—親子関係支援プログラムの経過にそったストレンジ・シチュエーション法との比較—日本心理臨床学会第33回大会発表論文集 174

平野慎太郎・岩本沙耶佳・山根隆宏・北川恵（二〇一三）.「安心感の輪」子育てプログラムに参加した親子の変化（2）託児場面における親子の行動観察から 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集 216

岩本沙耶佳・平野慎太郎・山根隆宏・北川恵（二〇一三）.「安心感の輪」子育てプログラムに参加した親子の変化（1）ストレンジ・シチュエーション法における親子の行動観察から 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集 215

Iwamoto, S., Hirano, S., Uesugi, Y., Suzuki, S., & Kitagawa, M. (2014, September). *Improvement in mother's capacity to understand child's mind and in child's attachment behavior after participating the Circle of Security program*. Poster presented at the International Society for The Prevention of Child Abuse and Neglect, Nagoya, Japan.

岩本沙耶佳・西山みどり・北川恵（二〇一三）. 母親がCircle of Security プログラムに参加した子どもの変化—不安への対処に注目した、託児中の観察から— 日本子どもの虐待防止学会第17回学術集会 いばらき大会抄録集, 224

岩本沙耶佳・山根隆宏・北川恵（二〇一三a）. アタッチメント理論に

基づく子ども理解の有効性—The Circle of Security Program の視点から— 日本心理臨床学会第31回大会発表論文集 578

岩本沙耶佳・山根隆宏・北川恵（二〇一三b）. 母親がThe Circle of Security programに参加した子どものアタッチメント行動の変化—SSPと託児場面の行動観察から—第18回 子ども虐待防止学会 高知りょうま大会抄録集 243

数井みゆき（二〇一三）. アタッチメント理論の概要 数井・遠藤（編著）アタッチメントの実践と応用：医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房 pp. 1-22.

北川恵（二〇〇七）. 精神病理とアタッチメントとの関連 数井みゆき・遠藤利彦（編著）アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp. 102-130.

北川恵（二〇一三）. アタッチメントに基づく親子関係支援—The Circle of Security programに参加した2歳児と母親の変化— 日本心理臨床学会第30回大会発表論文集 94

Kitagawa M. (2011, August). *The Circle of Security Intervention to Japanese mothers and effect evaluation by use of the modified Strange Situation, the COS Interview, and the projective method to assess attachment representation*. Symposium conducted at the 5th International Attachment Conference, Oslo, Norway.

北川恵（二〇一三a）. 親子の関係性に焦点つけた評価と支援を提供するプログラム：The Circle of Security プログラムの特徴と実践 子

ごもへの虐待とネグレクト, 14, 153-161.

北川恵 (二〇一二年b). 養育者支援・サークル・オブ・セキユリティ・プログラムの実践 数井みゆき (編著) アタッチメントの実践と応用: 医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房 pp. 23-43.

北川恵・安藤智子・松浦ひろみ・岩本沙耶佳 (訳) (二〇一三年). 「安心感の輪」子育てプログラム認定講師用DVDマニュアル日本語版 1.0 (Cooper, G., Hoffman, K., & Powell, B. (2009). Circle of Security Parenting A Relationship Based Parenting Program Facilitator DVD Manual 5.0)

北川恵・岩本沙耶佳 (二〇一二年). The Circle of Security program に参加した母親の内省機能の変化 第54回日本教育心理学会発表論文集, 658

Kitagawa, M., Iwamoto, S. (2013, August). *Implication of the Circle of Security @ program to Japanese mothers and their change: Focusing on mother-child interaction, mother's attachment representation and mother's reflectivity*. Poster presented at the 6th International Attachment Conference, Pavia, Italy.

Kitagawa, M., Iwamoto, S., Kazui, M., Kudo, S., Matsuura, H., & Umemura, T. (2014, June). *What element of the Circle of Security program is effective? Comparing the quality of parent-child relationship after parents received the psycho-education with after the tape review*. Symposium conducted at the 14th World Congress of World Association for Infant

Mental Health, Edinburgh, England.

Marrin, R., Cooper, G., Hoffman, K. T., & Powell, B. (2002). The circle of security project: Attachment-based intervention with caregiver-pre-school child dyads. *Attachment and Human Development, 4*, 107-124.

Oppenheim, D., & Goldsmith, D. F. (2008). *Attachment theory in clinical work with children: bridging the gap between research and practice*. New York: Guilford. (数井みゆき・北川恵・工藤晋平・青木豊 (訳) (二〇一一年). アタッチメントを応用した養育者親子の臨床ワークブック (ネルズマ書房))

篠原郁子 (二〇〇六年). 乳児を持つ母親におけるmind-mindedness測定方法の開発—母子相互作用との関連を含めて— 心理学研究 77, 114-121

Sproule, L. A., Egeland, B., Carlson, E. A., & Collins, W. A. (2005). *The development of the person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from Birth to Adulthood*. New York: Guilford Press.

Waters, E., Weinfield, N. S., & Hamilton, C. E. (2000). The Stability of Attachment Security from Infancy to Adolescence and Early Adulthood: General Discussion. *Child Development, 71*, 703-706.

(あ)たがわ めぐみ / 臨床心理学
(い)わんご らやか / 臨床心理学